



特定医療法人社団

鵬友会 ニュースレター

鵬友会ホームページ アドレス
<http://www.goodream.co.jp/hoyukai/>

第60号

発行:2011年4月15日
発行責任者:
特定医療法人社団 鵬友会
事務局長 池島 守

新年度を迎えて

～昨年度総括と今年度の目標～

医療法人社団鵬友会 常務理事 池島 守



先月11日、東日本大震災が発生しました。まずは、この災害により亡くなられた方のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災地の皆様に心よりお見舞い申し上げます。幸い当法人の各施設については大きな被害は免れましたが、計画停電やそれに伴う節電への対応により患者さんやご来院される方々には大変なご不便をお掛けしております。この場を借りてお詫び申し上げます。

さて、4月を迎え新年度がスタートし、我が鵬友会にも高校を卒業したばかりの方など30名近くの新入職員を迎えることができました。今月1日に行われた入職式で皆さんの顔を拝見いたしましたが、一人ひとりの目は輝き、どこか沈んだ今の状況を吹き飛ばしてくれるような、希望に満ち溢れた表情をしていました。一日も早く職場に慣れ、その若さとガッツで仕事に取り組まれることを願っております。

当法人の状況について昨年度を振り返ってみますと、診療報酬改定から1年、法人全体としてはどうかこの医療の激変する波に対応することができ、

まずまずの結果を残せましたが、一方で思うように収益をあげることができなかった施設もありました。それら施設については、しっかりと原因を究明し、それを真摯に受け止め、何らかの解決策を講ずる必要があります。これらについては、職員のより一層の奮起を期待しております。

今年度の大きな取り組みとして、横浜ほうゆう病院については、院外隣接地にデイケア施設を建設するため現在工事に取り掛かっております。完成すれば、院内で行っているデイケアをこの新施設へ移転し、ソフト、ハードの両面でより充実したサービスの提供が可能となります。また、認知症専門外来の拡充、入院病床の増床なども行う予定で、これまで以上に、認知症医療に貢献していけるものと思っております。ほうゆう園(院内保育室)については、今年度中にも横浜保育室としての認定を得て、法人職員のお子さんのもとより、子育てに不安を抱えている地域の皆様にもご利用いただけるよう整備して参ります。

こうした法人としての取り組みや考え方を全職員が共有できるよう、23年度の基本目標を次の5点に絞り込み、職員に浸透させます。

1. 患者および利用者の満足度向上
2. 包括医療体制の確立
3. 経営参画
4. 自己研鑽
5. 人材育成

原発事故による放射能汚染や電力不足など、震災の影響は予断を許さない状況にあります。しかし、私どもは上記5つの基本目標のもと医療法人としての責務を全うし、どのような局面においても患者、利用者第一の姿勢を崩さず、あらゆる努力をしていく所存でございます。皆様、本年度も宜しくお願いたします。

市民講座開催しました！

平成23年2月19日（土）14時～ 新中川病院にて

15回目を迎えた今回の市民講座のテーマは「看護・介護の現状－新中川病院の取り組み－」。新中川病院のことをもっとよく地域の方に知って頂こうと、事例を挙げながら日々の業務の中で心掛けていること、感じていることの発表を中心に構成しました。会場となった新中川病院2階リハビリ室には地域の方や施設関係者など100名近くの方にお集まり頂きました。



総合司会：新中川病院
松田事務部長



新中川病院 福田院長

◆不安を安心へ◆

まず初めに挨拶したのは同院福田千文院長。～新中川病院の歩み～と題した話の中で「患者や家族が抱えている不安を共有し和らげるよういかにして関わるか」という自らのモットーを語り、入院生活について具体例を挙げ、「高齢者には高齢者の役割がある」として、環境の変化を避け高齢者のペースで治療すること、高齢者自身の心身の力を最大限発揮して生活を送ることなどを実践し、「最期に達成感のある看取りを迎えられるように努力している」と述べました。最後に、「こうした新中川病院の取り組みを、地域に広め高齢者の尊厳を守り安心して暮らせる町づくりにまで発展させていきたい」と今後の展望を

語りました。続いて院内の取り組み発表では、3人の看護師長が演台へ立ち、それぞれ受け持つ部署の特色や実際の看護体験を話しました。

◆五感を使った看護◆

療養病棟を担当している松本看護師長は、「高齢者は骨折、褥瘡、肺炎など多くの病気を患う危険性があり、苦痛があったとしてもうまく表せないことが多い」とし、「些細な変化も見逃さないよう五感を使った看護を心掛けている」と述べました。



2 B病棟 松本師長

◆一人ひとりきめ細やかな対応を◆

二人目は、障害者病棟を担当する串田看護師長。がんの末期患者の症例を説明し、遺族へのケアの必要性、患者を尊重し要望にできるだけ応えていく看護の実践、家族の力の偉大さなど体験談を交え話し、「今後も一人ひとりきめ細やかな対応をしていきたい」と述べました。



3 B病棟 串田師長

◆今日をどう生きるか◆

最後は、外来担当の元村看護師長。発表の冒頭、参加者に対し「自分の最期はどこで迎えたいか」と投げかけ、医師と同行している訪問診療の体験をもとに、「今の医療・介護のシステムが在宅での看取りを難しくしている」と話し、「入院・退院・地域と切れ間のない流れが今の時代には必要だ」と訴えました。



外来 元村師長



永澤看護統括部長

続いて永澤看護統括部長が座長を務め、発表者4名に総合相談室の小向主任を加えた5名がシンポジストとして参加し、会場との意見交換会を行いました。会場からは介護保険制度に対する疑問点や終末期ケアについてなどの意見が出され、最後に福田院長が「当院は医療相談室ではなく総合相談室です。入院相談に限らずどんなことでもご相談下さい。」と締め括り、16時に終了しました。



総合相談室 小向主任